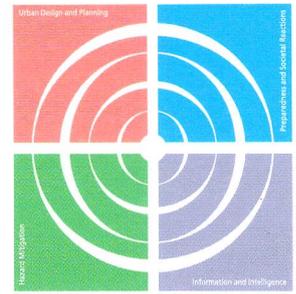




Research Center for Disaster Reduction Systems

Disaster Prevention Research Institute
Kyoto University

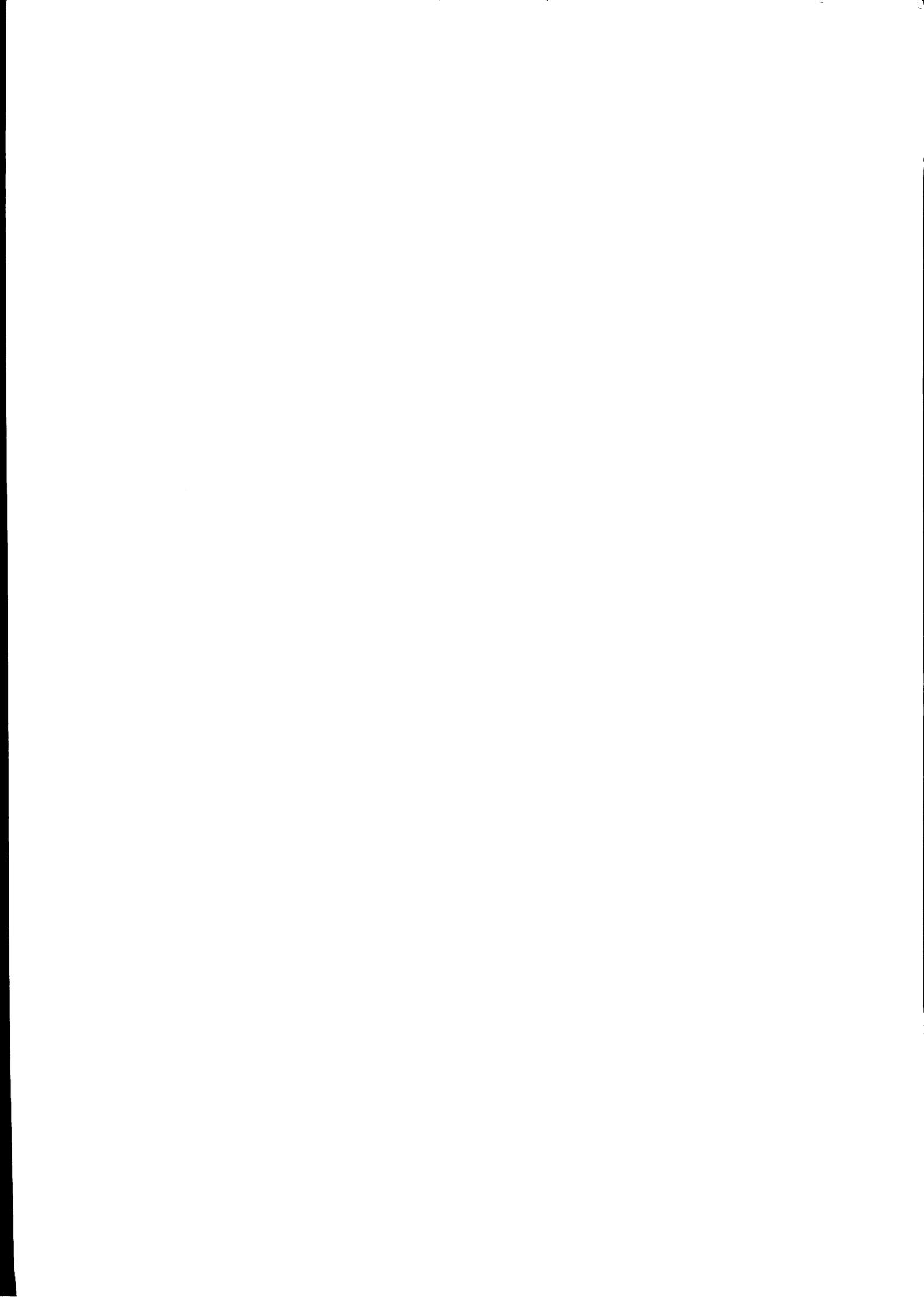


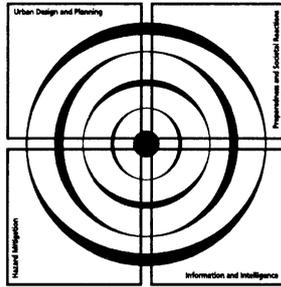
Technical Report DRS-1999-01

震災後の居住地の変化と くらしの実情に関する調査

*Determinants of the changes of residence and life reconstruction
among the 1995 Kobe earthquake victims.*

林 春男 編
Haruo Hayashi





Technical Report DRS-1999-01

震災後の居住地の変化と くらしの実情に関する調査

*Determinants of the changes of residence and life reconstruction
among the 1995 Kobe earthquake victims.*

林 春男 編
Haruo Hayashi



THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

はじめに

阪神・淡路大震災から5年を迎えようとしている。今年は、トルコ、台湾で大きな地震災害が発生し、多くの被害が生じ、今後困難な復興の過程が待ち受けている。両国の被災地を訪れると、改めて阪神・淡路大震災の被害の甚大さを思い知らされる。同時に、どちらも被災者の生活再建が復興対策の中心に位置づけられてきている。これらに対して、阪神・淡路大震災は多くの教訓を与えることになる。特に、わが国の防災においては、これまで考えられてこなかった生活再建過程については、私たち自身が、この5年間をふりかえり、教訓を体系化する必要がある。この調査は、この巨大な都市災害から立ち直ろうと努力してきた被災地の人々の努力を科学的に調査し、次の災害に備えることを目的としている。

この報告書には、平成10年度、11年度の2年度にわたって実施した「震災後の居住地の変化と暮らしの実情に関する調査」の結果がまとめられている。本調査は、最も被害が甚大だった震度7又は都市ガスの供給が停止した阪神及び淡路地域を対象に、平成11年3月に実施した。回答者の抽出を無作為に行い、震災発生から4年間の被災地の人々の動きのパターンを明らかにすることと、それにある程度、定量的な予測を与えることを狙いとしている。また、実数を正確に知る術がない被災地外へ移動した被災者については、入手可能な資料の中では最も規模の大きな県外在住者向けの「ひょうご便り」の送付先リストを母集団として、その特徴を明らかにした。

本調査は、震災4年目の時点での実態把握と今後の防災への寄与を目的として、兵庫県が企画し、財団法人阪神・淡路大震災記念協会からの委託事業として、京都大学防災研究所巨大災害研究センターが実施した。調査設計から報告書の作成まですべてにわたって、関西学院大学社会学部立木茂雄教授には多大なご指導をいただいた。また、関西学院大学大学院生田村圭子さん、京都大学大学院生木村玲欧くんには多大な貢献をいただいた。調査の実施はハイパーリサーチ社の浦田康幸さんに全面的にご協力をいただいた。最後に、兵庫県生活復興局生活復興推進課及び神戸市生活再建本部の全面的なご協力がなければ、この調査が実施できなかったことを記して、謝意にかえたい。

明確な終了点を持つ研究は存在しない。その意味では、本報告書もすべてを語りつくしたわけではない。今後も研究報告書の形で、今回の経験を教訓化する作業をここに集まった仲間と続けていく所存である。なお、この報告書が今後の災害対策の一助となれば望外の喜びである。

京都大学防災研究所教授

林 春男

THE [illegible]

[illegible text]

[illegible text]

[illegible text]

[illegible text]

[illegible text]

[illegible text]

目 次

※目次のページ番号は各編ごとに打ってある。

ページ

巻頭言及び提言

はじめに(京都大学防災研究所 教授 林春男) ----- 1

I 調査概要 編

1. 調査のねらい ----- 1
2. 調査概要 ----- 3
3. 回答者の特性及び回収状況 ----- 4

II 調査結果要約 編

1. 被害の実態 ----- 1
① 物理的な被害体験 1
 1) 生命身体に関する被害 1
 2) 建物被害 1
 3) 家財の被害 3
② 主観的な被害体験 4
③ 被害総額 6
④ 被災者に対する経済的措置 7
2. 住まいの移動 ----- 9
① 当日の避難行動 9
② 移動のパターン 11
③ 移動の理由 12
④ 時間区分による移動実態 14
 1) 各時点における移動 14
 2) 住居形態の違い 17
⑤ 住まいに関するニーズと決断 20
⑥ 解体 24
⑦ 現在の住まい 25
⑧ 居住地決定の基本軸 28
3. 支援者について ----- 30
① 支援者の豊かさとそのバラエティ 30
② どの時点でどのようなネットワークが活用されたのか 32
③ 時間区分による支援の実態 35

4. 被災後の家族関係の変化と、現在のストレスや生活の復興に与える影響	38
① 家族関係の全般的な変化	38
② 震災から2～4日、2カ月、半年後の家族のきずなと現在のストレス度・生活復興の関係	39
5. 仕事の変遷	43
6. 市民性は自律と連帯－市民意識の基本軸－	46
① 市民意識の基本軸	46
② 震災前後での市民性の変化	48
③ 市民性が個人の生活復興に与える影響	49
7. 災害の意味づけ	50
8. 生活復興の7つの要素：自由回答の記述の分析を通して	52
9. 復興の状況	54
1) まちの復興イメージ	54
2) 移転希望	57
3) ストレスについて	58
4) 暮らしのようす	64
5) 生活満足度	65

III 提言 編

IV 研究報告 編

1. 被災者の移動とすまいの決定に関して (木村)	1
2. ストレス強度とその規定因 (木村)	10
3. 英語論文 Determinants of the Changes of Residence and Life Reconstruction among the 1995 Kobe Earthquake Victims (立木)	14

付属資料 編

集計結果 GT 表 (質問順)
用語説明

※用語説明が必要な語句については本文中に※印と番号を振って巻末に付してある。